

私のふるさと

我が心のオダワラ

戸田 博子

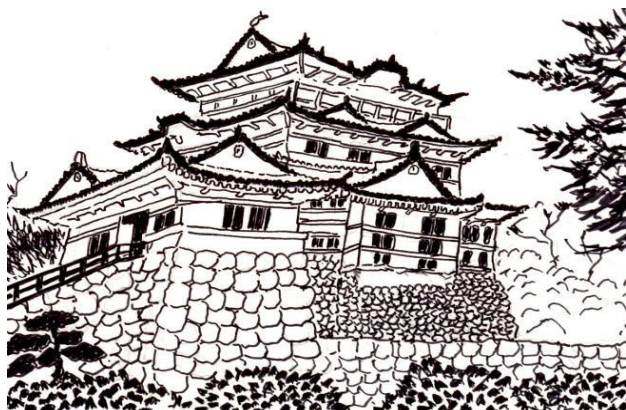
「ふるさと」という響きは、生まれたところ、実家があったところなどを連想するが、私にはそういう場所はないように思う。

生まれたのは大阪だったが、父の転勤で2カ月で札幌琴似へ移った。5才まで過ごしたが記憶はあまりない。雪が大好きだった。橇（そり）に寝転んで坂を滑るのがすごく楽しかったのを鮮明に憶えている。

幼稚園に入る頃大阪に父が転勤したので、布施（今の東大阪市）に7年住んだ。今考えると、自然の森もなく虫もあまりいなかった。すぐそばを毎日色が変わる長瀬川が流れていたが、子どもにとっては汚いと感じなかったようだ。

ただ、市立だが変った小学校に通った。「通知簿」なしだったので、成績を気にしなくてよかった。給食がないので、お昼はお弁当を好きな場所で時間をかけて食べられた。ぐずの私にはとても楽しい学校だった。

中学校に行くとき、また父の転勤で神奈川県の小田原市へ。この小田原が、私にとり「ふるさと」だと思っている。越したときは4月だったので、一面レンゲ畑が広がり、梨の白い花が満開に咲いていた。雪を頂いた富士山が、箱根連山の後ろに堂々と立ち上がっているその時の景色は忘れられない。私の山好きは、この時に始まったのかも知れない。



自然のすばらしさはよかったのだが、学校生活は失敗の連続だった。まず昼食は、全員そろってから「いただきます」。黙々と食べる。全員が食べ終わるまで、皆で着席したまま待つ。ぐずの私には苦行となった。また、成績表というものをもらったことがなかったので、得意だと思っていた美術や体育が「3」と付いた。提出作品を出さない。勝手に行動する癖がついているのでは、その評価は当然だった。今の時代なら問題児だが、先生や友達に助けられて1年後には学校大好きになった。

小田原は、北条氏が治めた城下町だ。お城やお堀があり、5月には大名行列のお城祭りがある。

海のそばなので新鮮な魚をつかった蒲鉾や、アジのたたきは皆さんもご存知だと思う。

市の中心部から少し離れるが、曾我というところがあり、曾我兄弟のあだ討ち話が伝わっている。近年は曾我梅林が有名で、梅干しの産地でもある。

伝統産業としては、木工品、特に寄木細工の工房があり、小物から高級絵画までいろいろと見ることができる。



中学・高校・大学・就職・結婚・子育てと人生の転期を小田原で経験した。私の生き方に大きな影響を与えたところだった。

朝日新聞の「折々のことば」に
生まれ故郷は、わたしたちがある時点で、成長したり形成されたりしたあらゆる場所に、少しずつ存在する。（ヨゼフ・チャペック）

これを読んでそうなんだと確信した。

奈良に住んで37年近くなる。この年月は、私の人生の仕上げの「ふるさと」になるのだろうか？